ReAL

創立60周年記念特別号

2012.9 Vol.17

NIKAKAI ASSOCIATION OF PHOTOGRAPHERS

記念鼎談

二科会写真部の創立60周年に「草創期その後」を語る

<出席者>

大竹省二理事長　　齋藤康一氏（写真家）　　林　義勝氏（写真家）

大竹理事長宅にて記念撮影。

昭和28年（1953年）に第１回二科会写真部展を開催してから二科会写真部は今年、創立60周年という節目の年を迎えました。

当時、気鋭の若手写真家として活躍していた林忠彦、秋山庄太郎、早田雄二、大竹省二の四人が創立会員となって二科会に写真部が発足し、以来、毎年開催される二科展の写真部門として、会員・会友作品および公募作品の展覧会を開催してきました。

そして60年の歳月を経て、二科会写真部は、わが国でもっとも大きな影響力を持つ写真団体のひとつにまで成長し、47都道府県に支部を設けて全国的に活動を展開しています。

創立から長い歴史のなかで、創立会員をはじめ多くの方々が二科会写真部の発展に尽力されてきました。特に林忠彦、秋山庄太郎両創立会員は、会の誕生から多くの時間と情熱を傾注してきました。その両創立会員のもっとも近くから、二科会写真部の変遷を見聞きされてきた写真家の齋藤康一氏と林義勝氏をゲストにお招きして、大竹省二理事長とともに60年間の歴史を振り返り、草創期とその後のエピソードなどを語っていただきました。

若い四人の写真家が加わって二科会に写真部が発足

大竹　早いもので、二科会写真部も創立六十周年になりました。改めて振り返ってみると、六十年の間よく続けてこられたと思います。今日の二科会写真部があるのは林忠彦さん、秋山庄太郎くん、早田雄二さんの尽力の賜物なんですが、無念にもお三人とも他界されてしまいました。向こうで三人集まって麻雀をやってるのかもしれないですね（笑）。それを考えると長い歳月の経過を思い知らされますね。

齋藤　そうですねえ。六十年間の道程を歩んできたのは、本当にすごいことですよ。

大竹　林義勝さんは、お父さんの林さんにずっとついていられたから、二科会写真部のことは間接的によくわかっていたんではないですか。

林　私の場合、撮影などで父と一緒に地方へ行ったときに、二科会写真部の会員の方とか、地方の支部員の方々にお会いする機会が多くあって、そういうことで二科の方々とは面識がありました。

大竹　そうでしょうね。齋藤さんも二科とは切っても切れない関わりというか、つながりがあったんではないですか。

齋藤　関わりがあったのは、二科会写真部が発足した、その初期の頃ですね。僕は昭和二九年に林忠彦先生の助手にしてもらったんですが、それが大学一年のときなんです。その頃は、もう二科会写真部が始まっていました。

大竹　それは相当に古いね。

齋藤　古いですよね。まだ十九歳の頃だったですから（笑）。

大竹　じつは早田さんのお身内の方にも話を伺いたかったのですが、今回は残念ながら連絡がつかなくて叶いませんでした。

林　私は早田先生の息子さんとけっこう仲良くしていて、撮影でリュウスタジオを使うことも多かったんです。

齋藤　そうですか。六本木のリュウスタジオは、早田さんが作ったレンタルスタジオでしたね。

大竹　話は戻りますが、ある日、林さんに会ったときに、二科会の東郷青児さんを知ってるかと聞かれたので、名前は存じ上げていましたから、東郷さんがどうかされたんですか、という話になった。「じつは東郷さんから、今は写真界もバラバラだけど、それをまとめる意味でも二科会に写真部を創ったらどうかと持ちかけられていて、秋山くんもやると言っているので、君も一緒にどうか」と誘われた。それが銀座の早田スタジオの近所だった。当時、林さんは銀座によく出没していたんだね。

齋藤　銀座にはルパンとか、林先生の馴染みの店がありましたからね。

大竹　そのとおりですね。その銀座並木通りの角っこのビルに早田雄二さんのスタジオがあって、そこで最初の審査をやったんですよ。それは写真部を組織しても、審査とか皆が集まる場所がないので、誰かスタジオを持っていないかということでね。そこに早田スタジオがあった。それで早田さんを誘って加わってもらい、四人が創立会員になって二科会写真部が発足した。まだ四人とも三十代前半で若かった。

齋藤　いや僕は、どうしてこの四人が創立会員になったのかが、ある意味で不思議だったんですよ。特に、なぜ早田さんが入っていたのかがね。お三方とはちょっと違うのではないかと思っていたんですよ。

林　早田雄二先生は、そのころからファッション撮影をやられていたんですか。

齋藤　早田さんは主に映画雑誌の仕事ですね。『映画ファン』でしたか、その編集部がビルの階下にあって、上の階に早田スタジオがあった。その頃、中村正也さんが早田スタジオに間借りしていましたね。

大竹　そうだったね。一時期だけど正也さんが早田スタジオにいました。

齋藤　昭和二九年頃のことですが、日比谷の今の日生劇場がある場所の角のところに生命保険会社があって、その地下室に杉山写真研究所がありましたね。当時、そこが杉山吉良さんと林先生、秋山先生の事務所になっていたんです。まあ、杉山さんが借りていた場所を共同で事務所に使っていたんだと思います。その後、杉山吉良さんはブラジルへ行かれて、秋山先生は今井町にスタジオをつくった。林先生もどこかに移られましたね。

林　赤坂に居たことがあります。ジャパンパブリシティですね。

齋藤　そうそう、それまでは二科会写真部の事務所も杉山工房になっていて、応募作品が全国から送られてきた。その応募作品の審査を早田スタジオですることになり、近くの商店からリヤカーを借りてきて、それに作品を積み込んで運んだんですよ。銀座の繁華街をリヤカーを引いて早田スタジオまで何回も往復しました（笑）。そう、忘れもしないのがね、福田勝治さんの作品が全四倍ぐらいの大きさがあって、リヤカーからはみ出してしまう。それもヌード写真で、布で覆えばいいのに、そのままだから通りの人たちがゲラゲラ笑うわけですよ。そのヌードも、大股開きでバラの花がポンとある刺激的なポーズなんですね。恥ずかしかったけど、可笑しかったですね。よく覚えていますよ。

大竹　あの頃は、いろいろお手伝いをお願いしていましたね。落選作品をリヤカーで風呂屋に運んで行くなんてこともしていましたからね。

齋藤　秋山スタジオが今井町から霞町に移って、そこで審査するようになってからも、助手くんたちが落ちた写真を全部近くの銭湯に持って行っていた。銭湯のボイラーで燃してもらっていたんだけれど、そのうち風呂屋でも引き取ってくれなくなった。その頃、僕はもう助手をやめていて、その後どうなったかは知らないですが、そういう時代だったんですね。

大竹　応募作品をやたら捨てられないし、大きいパネルを処分するのに困った。

齋藤　落選の作品が処分できずに残っていて、それを間違って展示しちゃったりとか（笑）。僕は林先生の助手になって最初に

齋藤康一氏

やったのが二科会写真部の手伝いですから、今でも忘れられないんですよ。

大竹　義勝さんは、その頃は生まれていたのかな。

林　二科会写真部ができた一九五三年は三歳でした。

齋藤　僕は林先生のところに三年間いたので、助手だった頃はまだ四、五歳なんだ。写真界で一番長い付き合いだね（笑）。

大竹　義勝さんは、二科会写真部とともに成長してきたわけだね。

先輩写真家が多く出品して豪華メンバーで写真展がスタート

齋藤　当初は、応募点数は少なかったけど、すごい写真家が出品していましたね。

大竹　第1回展から土門拳さんが出品されていましたね。

林　それで第1回展の二科賞が緑川洋一さんですね。

齋藤　推薦に土門さんとか杵島隆さん、鳥取の植田正治さんといった、そうそうたる方々が名を連ねていましたね。

大竹　今考えると豪華メンバーですよ。

齋藤　二科の作品で強く印象に残っているのが、第2回展の二科賞になった植田さんの水をテーマした作品ですね。写真にこんな表現があるのかって、すごく新鮮な驚きを感じました。

大竹　プロ写真家として活躍されていた先輩たちが応援してくれたし、緑川さんや植田さんをはじめ地方のアマチュア写真家も積極的に参加してくれた。そして二科賞のほかに、カメラメーカーにお願いしてカメラなどの賞品を提供してもらって、メーカー賞を出すこともできましたね。あれから今日まで写真業界には、本当に長くご支援をいただいて感謝しております。

齋藤　それと二科会写真部ができて、プロ写真家とアマチュア写真界の融和が生まれて交流が深くなったように思うんですが、その功績は大変に大きいと思いますね。

大竹　そうですね、確かにプロ写真家とアマチュア写真家が同時に参加した写真展は、まだ少なかった。

齋藤　プロ写真家として活躍していた土門拳さんや福田勝治さんが最初から出品されたんですから、ある意味驚きですね。

大竹　それは驚いたね。木村伊兵衛さんも出品するかどうか、だいぶ迷っていたらしいですよ。

齋藤　その話は聞いたことがあります。

大竹　当時の応募作品は、ほとんどがモノクロの大伸ばしでしたからね。

齋藤　出品作品の大きさがフリーで、組写真も大きい一枚のパネルに貼り込んでいましたね。ですから応募作品のほとんどが、全紙とか全倍のパネル貼りで送られて来たんですよ。僕もしばらく秋山スタジオに居候していましたから知っているんですが、秋山スタジオの若いスタッフたちは、応募作品の整理に悪戦苦闘していましたね。もう、大変な作業でした。たぶん応募作品が四ツ切プリントになったのは、秋山スタジオの助手さんたちからの強い要望があったからだと思いますよ。

大竹　創立当初は応募点数も少なくて、お金もなかったので、賞金を払うのに四苦八苦していた。それが四ツ切プリントで応募できることになってからは応募点数がどっと増え、収入も増えてきて、ちゃんと賞金が払えるようになった。

齋藤　そう言えば、第2回展の植田正治さんの二科賞が賞金十万円で、この賞金が払えなくて分割にしたという話は有名でしたね（笑）。

大竹　そんなことがありましたね。確かに資金繰りはだいぶ大変だった。

齋藤　第10回展でしたか、僕も日本光学賞をもらったんですが、このとき二科賞になることを期待していたら、「なんだ齋藤くんか」って言われて、結局、その年の二科賞は該当作品なしになって、賞金十万円がもらえなかった（笑）。

林　義勝氏

大竹　あの頃の賞金十万円はけっこうな金額でしたからね、皆が狙っていたんじゃあないですか。

写真家が活躍の場を広げはじめ情熱と活気に満ちていた時代

大竹　創立当時の写真界は、まだそれほど成長していたとは言えないけれど、写真に対する情熱はありましたね。齋藤さんも大学生のころから助手になって、卒業と同時にプロ写真家として仕事をされたわけですからね。流れとしては、若手写真家が続々登場して活躍するような機運にはなっていたね。

齋藤　確かに写真家という職業が徐々に確立されてきていました。

大竹　義勝さんは、もう少し後の時代になりますけど、お父さんの職業を継いで写真家になった。

林　子供の頃は写真家という職業がよくわからなかったですけど、写真集などが周りにたくさんあったし、いつも家に写真関係の方がいらっしゃったり、写真は常に身近にありましたね。そうした影響もあって、結果的に私も写真家という職業を選ぶことになったんですが、父親が写真家で、その子供も写真家になったケースは、私の年代では少ないかもしれませんね。現在はけっこういらっしゃいますけど。

大竹　まだ写真家がメディアに登場することが、それほど多くなかったからね。

林　我が家のアルバムを見ると、父がテレビに出演しているスナップ写真とかが結構あるんです。写真家がテレビなどのメディアに出はじめて、社会的にも認知されはじめた時代だったのかなって思います。

大竹　そうですね。ＮＨＫのテレビ放送が開始したのも、ちょうど二科会に写真部ができた頃だね。当時、写真専門誌はアルスから出ていた『カメラ』とかね、少なかった。二科の写真展をいち早く取り上げてくれたのが『カメラ』ですよ。

齋藤　『アサヒカメラ』も戦前からあったんですが、戦時中は休刊していた。

大竹　『アサヒカメラ』が復刊したのは昭和二四年頃ですね。

齋藤　『日本カメラ』がその後で、昭和二五年か二六年頃の創刊ですね。ですから写真家が作品をつくっても発表する媒体があまりなかった。

大竹　まだ写真家ではなくて、一般には写真屋さんの感覚でしたね。なにしろカメラも高価だったし、フィルムも不足していましたね。

齋藤　もう昭和二八年頃になるとフィルムは結構ありましたが、終戦後しばらくはなかなか入手できなかった。僕は山田商会で面白いものを見せてもらったことがあるんですよ。たぶん昭和二二年か二三年頃のものだったと思うんですけど、木村伊兵衛五十本、土門拳五十本、林忠彦三十本、秋山庄太郎とか写真家の名前が書いてあって、売り上げ表みたいなものですね。写真家別にフィルム本数のリストがあって、ランク分けしてフィルムを分配していたんでしょうね。なぜか秋山先生はランクが上でしたね。

大竹　僕は米軍施設のアニーパイル劇場にいましたから、その頃でもコダックのフィルムを使えたんですね。カラーフィルムのコダクロームは感度ＡＳＡ10ですよ。けれどコダクロームは外式現像なので、現像するところがないんだね。

齋藤　ハワイに送って現像していた。ただ当時はモノクロが主流だったので、一般的にはカラーフィルムはそれほど使われていなかったですね。

大竹　モノクロはコダックのダブルＸがありましたね。昭和二九年頃にトライＸが出て、ＡＳＡ400になった。林さんが、「大竹くん、こんなに速いシャッターが切れるんだけど、大丈夫かね」なんて言ってた。

齋藤　コダックのフィルムは高価だったので、アマチュア写真家はもっぱら国産フィ

ルムで撮っていましたね。

大竹　とにかく何かと大変だったけど、それでも写真家が活気に満ちていた時代でしたよ。

齋藤　確かに若かったし、元気はありましたね。あれから六十周年を迎えるわけで、感慨深いものがありますね。二科展の会場が国立新美術館に移ったのは第55回展ですから、今度で六回目になるんですね。でもね、あれだけ広い会場で、あの点数を展示するのはすごいことですよ。

大竹　全国的な展覧会にふさわしい規模になりましたね。約一千四百点ほど展示しますから、見るのも時間がかかりますね。

齋藤　初期の頃の話ですけど、上野の東京都美術館でしたね。今の建物じゃなくて、その前の建物で地下の彫塑室。そこの半分のスペースが写真部の展示会場だった。そこで展示の飾り付けを手伝ったことがあるんですけど、点数が少なかったので、展示作業も美術館の係の人と僕の二人だけでした。それがいまや千数百点を展示しているわけで、驚きますね。

アマチュア写真家の参加を得て全国組織として発展

大竹　義勝さんは、事務所とかでお父さんと二科の話をすることはありましたか。

林　二科のことはあまり話さなかったですね。父は〝股旅の忠さん〟いう異名があったほどですから、地方に行って撮影することが多かったので、それに撮影アシスタントとして付いて行くと、地方でいろんな二科会写真部の方々とお会いする機会があるわけですね。ですから二科関係の方々と知り合う機会は多かったです。

齋藤　二科会写真部がこれだけ全国的に発展したのは、そうした林先生をはじめ創立会員の先生方が頻繁に地方に出かけたりして、全国のアマチュアの人たちを取り込んできた功績ですよね。その努力というのは、すごく大きいですよ。

林　父の郷里が山口県徳山市で、帰郷するときに車で行くから一緒に来いよって、助手を兼ねて付いて行くわけです。自動車で普通に行くと一日かからない距離なのに、それが四日くらいかかるんですね。途中、撮影しながら静岡に寄ってから名古屋に寄って、その度にお仲間と会うんです。それで、その夜は地元の皆さんが集まって写真談義をして、麻雀をして、翌日は魚釣りをやったりとか、とにかく道草が多かったですね。本当に大勢の人が集まってくるので、それにびっくりしました。

齋藤　集まる人たちは二科関係だけじゃなくて…。

林　二科関係の方が中心ですけど、若い人から高齢の方まで幅が広くて、年齢とか職業とかは関係なく、写真を介して皆さんが対等に接しているというか、絆を深めて楽しんでいる、そんな雰囲気がいいなあと思っていました。

大竹　林さんの功績、秋山くんの功績、それぞれ大きいですよ。地方のアマチュアを動員して、各地にそれぞれ支部を設立し、その運営を地元のアマチュアに任せるという、地方に重点を置いたシステムにしたことがよかったと思いますね。

齋藤　今や全国の都道府県にすべて支部があるわけですよね。本部は会員・会友によって構成され、支部には支部員がいる。完全に全国的な組織ができていて、それをちゃんと運営しているのが素晴らしい。各支部ごとに支部展も開催しているんですか。

大竹　ほとんどの支部が独自に支部展を開催していますね。

林　父のアルバムの話なんですけど、二科展の前夜祭ですか、パレードみたいな写真が残っているんですね。外車のオープンカーに東郷青児さんが座られていて、その車に父も一緒に乗っている写真なんですが、その写真から想像すると、当時の二科展の前夜祭はかなり派手だったんですね。

大竹　浅草からストリッパーを連れてきて、裸でオープンカーに乗せて銀座通りを行進したり、まさにお祭り騒ぎをしてましたよ。

齋藤　そうした前夜祭は三年間ほどで終わってるんじゃないですかね。

林　そういう写真がたくさん残っていて、どの写真を見ても、秋山先生も父も本当に満面笑みで、楽しそうな様子が伝わってくる写真が多いですね。

写真界の将来へ向けて若い力で新たな潮流をつくる

齋藤　写真が作品として認められるようになった、その評価を押し上げたのが、やっぱり二科展に写真部門ができてからだと思いますね。だから、そういった意味でも二科には勢いがあった。創立当時と今とではぜんぜん感覚的に違うんじゃないかな。

大竹　僕らが二科会写真部を始めたのは三十代ですから、それは意欲的でしたね。今は写真界全体が歳をとっちゃって、要するに、僕を含めて老化現象が始まっているんですね。二科会写真部の会員も高齢になって退会したり、亡くなる方も多くなっていますよ。会員で体力的に写真が撮れなくなっている人もいて、古い写真を焼き直して展覧会に出品するなんてこともある。これでは、どんどん衰えていきますよね。これを何とかしないと現状維持もむずかしくなりますね。二科会写真部を独立した団体としていかに存続させるか、どう運営して行くか、今後というか現在の大きな課題であることはハッキリしているわけです。会員それぞれが、そういった危機感をぜひ共有してもらいたいと思いますね。

林　父は東海道を最後のライフワークと決めて残された。命と向き合いながらの壮絶な仕事でしたが、今になって考えると、あの東海道の撮影は、自分のためではあったけれど、全国のアマチュアの方々、特に二科の会員・会友、支部メンバーに向けて、写真に対しての強い信念をメッセージとして伝えたかったのではないかと思います。父がよく言っていた「今やっている仕事を大切にして、長く続けることが大事だよ」という言葉も、私にだけじゃなくて、全国のアマチュア写真家の方々に、きちんと写真と向き合って長く続けてほしいという、父の願いだったのではないかと思うようになりました。

大竹　林さんは体調が悪くなってからも撮影に出られ、一つのテーマに取り組んで立派な仕事をされましたね。やっぱり病床でも、二科とか写真界の将来を大変に心配されていましたよ。

林　でも、大竹先生が尽力されておられるので、ありがたいと思っています。

大竹　なかなか周囲から理解されないこともありますけど、なんとか頑張って二科会写真部を継続して行かねばと思っています。

林　二科の写真部は全国規模の組織ですが、ただ、大竹先生もご高齢ですし、今後についてのビジョンというか、二科の将来についていろいろとお考えになっていらっしゃると思いますが…。

大竹　まあ、それは一番むずかしい問題ですね。やっぱり今の運営方法では、いずれ先が見えてしまうというか、二科会写真部そのものが行き詰まってしまうことは予見できますよ。それをどうするか、若い人の知恵がほしいんですね。これだけ大きな組織を維持するためには、ただ写真を楽しむだけの仲間意識だけではだめなんですよ。もっと経営感覚を養って、合理的に組織運営をする必要がありますね。将来へ向けて組織を活性化させるために、知恵と実行力のある若い人材がほしいですね。

林　それには若い人に二科の会員とか会友になってもらうことだと思いますが、外部から起用することもお考えになっておられるのでしょうか。

大竹　外部の方にお願いすることもあるかもしれませんが、基本的にはやっぱり内部で育てることが大事ですので、有能な人材を登用したいと思っています。だけど、美術団体は排他的であってはいけないと思っていますので、いろんな意見を聞きながら時代に敏感に対応して行くことも必要だと思います。ですから、外部の方々に支援をお願いして、たとえば齋藤さんとか義勝さんにご協力いただいてね、二科会写真部のことだけでなく、写真界の将来へ向けて新たな潮流をつくることができたらと思います。ぜひお手伝いをお願いしたいと思いますね。

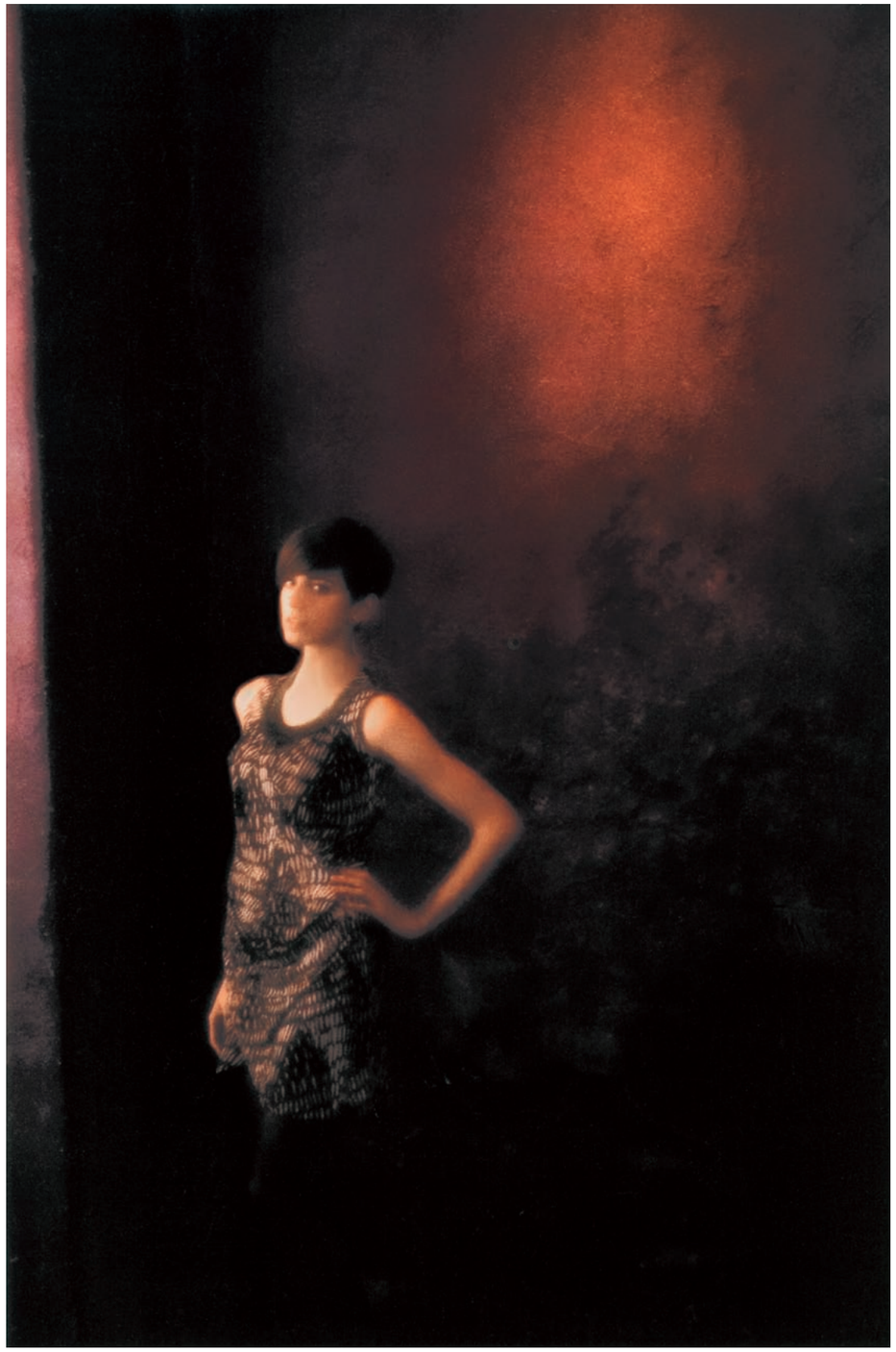
本日は貴重なお話をどうもありがとうございました。

●写真撮影／大竹あゆみ

大竹省二理事長

㈳二科会写真部創立60周年記念撮影会を関東地区の各支部が協力して東京で実施しました。都内のハウススタジオに特別会員・会員・会友・支部員、一般参加者が多数参集し、外国人モデルの撮影を楽しみました。当日の参加者は135名で、52名から304点の作品応募があり、審査の結果「REAL 優秀賞」5点、「富士フイルム賞」5点が決定しました。

創立60周年記念 関東地区撮影会



REAL 優秀賞「斜光」杉本雅美(会友・鳥取支部)

REAL 優秀賞「追憶」大塚峯夫(会友・埼玉支部)

REAL 優秀賞「想い」小林一夫（茨城支部員）

関東地区撮影会

REAL 優秀賞「まなざし」村野隆治（会友推挙・埼玉支部）

「窓辺」森田早輝子(茨城支部員)

「おどりつかれて」田口正平(一般・埼玉)

「ポージング」
佐藤ちえ子(会員・山梨支部)

富士フイルム賞

※「富士フイルム賞」にはフォトブック「プレミアム作品集」制作権が授与される

「ポートレート(順光)」若城章良(会友・大阪支部)

「窓」佐々木節子(埼玉支部員)

●関東地区撮影会

都内2カ所のハウススタジオで外国人モデルをモチーフにした撮影会を開催。ハウススタジオはパリの下町などをイメージした雰囲気のあるスタジオで、演出を凝らしたモデル撮影が行われました。

日時：2012年2月23日(木) 12:00〜16:00
場所：スタジオヴァンス RIVER SIDE(水天宮)
　　スタジオヴァンス CANAL SIDE(月島)
講師：今井寿雄会員、角尾栄治会員、蜂須賀秀紀会員、森井禎紹会員
参加費：15,000円
主催／協力：東京支部・神奈川支部・埼玉支部・千葉支部・茨城支部・山梨支部
協賛：富士フイルムイメージングシステムズ株式会社

REAL 優秀賞「ぬれた瞳」瀬尾繁喜(茨城支部員)

㈳二科会写真部創立60周年記念撮影会を近畿地区の各支部が協力して大阪で実施しました。大阪府豊中市・服部緑地公園内にある日本民家集落博物館で、5パターンの被写体を設定して撮影を楽しみました。当日の参加者は338名で、66名から294点の作品応募があり、審査の結果「REAL 優秀賞」5点、「富士フイルム賞」5点が決定しました。

創立60周年記念 近畿地区撮影会

REAL 優秀賞「佇む」中地功夫(大阪支部員)

REAL 優秀賞「姉妹」内山　修(三重支部員)

REAL 優秀賞「ひと休み」藤井雅子(兵庫支部員)

近畿地区撮影会

REAL 優秀賞「嫁ぐ日」棚橋仁志(徳島支部員)

「姉妹」今井清博(大阪支部員)

「母と娘」岡田千恵(大阪支部員)

「眼力」中山信博(一般・京都)

富士フイルム賞

※「富士フイルム賞」にはフォトブック「プレミアム作品集」制作権が授与される

「仲良し」狩野文代(一般・大阪)

「寿」嶋崎敬子(一般・兵庫)

●近畿地区撮影会

5月13日(日)に大阪・服部緑地公園内、日本古来の茅葺民家が多数ある日本民家集落博物館で撮影会を開催。5つの被写体「石見神楽」「淡路人形」の上演と「お遍路姿」「花嫁姿」「女性モデル２名」を撮影しました。

日時：2012年5月13日(日) 13:00～16:30
場所：大阪府豊中市・服部緑地公園内・日本民家集落博物館
講師：西岡伸太特別会員、木村晃造会員、森井禎紹会員、野水正朔会員、照井四郎会員、山岡成男会員、水谷勝昭会友
参加費：4,000円
主催／協力：大阪支部・兵庫支部・京都支部・滋賀支部・奈良支部・和歌山支部
協賛：富士フイルムイメージングシステムズ株式会社

REAL 優秀賞「出番前」市口雅子(一般・兵庫)

国立新美術館で「第60回二科会写真部展」開催

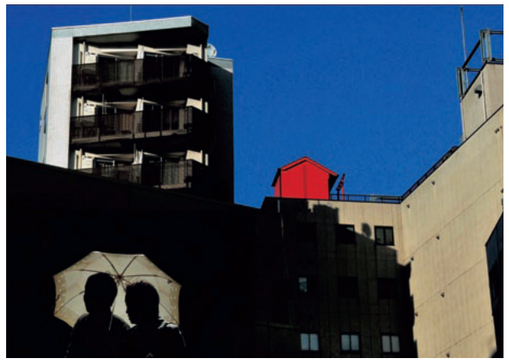
第97回二科展が東京・六本木の国立新美術館で、絵画・彫刻・デザイン・写真の4部門の美術公募展として9月5日に開幕しました。本年、二科会写真部展は第60回を迎え、特別に「創立60周年記念賞」を設けるなど、記念の年にふさわしい展覧会となりました。展示会場には創立会員1点、特別会員17点、会員184点、会友203点、会員遺作５点、会友遺作2点、一般部門入賞30点・入選781点、組写真部門入賞20点・入選199点、学生部門入賞10点・入選13点の作品総1,465点を展示しました。

●第60回二科会写真部展（第97回二科展）
会期＝ 9月5日(水)～9月17日(月)（9月11日休館）
10:00～18:00（金曜日は20:00まで）
会場＝国立新美術館

全国知事会賞「送り火」永峰康則（香川）

二科賞「スコール」中西武臣（兵庫）

学生二科賞「迷子少女」轟原まなみ（滋賀）


創立60周年記念賞「昼下がり」大西満也（兵庫）

創立60周年を迎え記念事業を実施

二科会写真部創立60周年にあたり、年間を通して数々の記念事業を企画し、順次実施しています。2011年に設置した「創立60周年記念事業実行委員会」を中心に運営し、各支部の協力を得て二科会写真部の諸活動を広く内外にアピールします。記念事業の収益の一部は東日本大震災被災地への義援金とします。

「創立60周年記念賞」など贈賞

●「特別功労賞」を大竹省二理事長・創立会員に贈賞します。
●「感謝状」を第60回展協賛の1団体と28社29事業部に贈呈します。
●「創立60周年記念賞」を第60回展出品の特別会員・会員から1名、会友から1名に授与、一般部門および組写真部門の入選者から1名に授与します。
●「創立60周年記念特別賞」を第60回展遺作出品の特別会員・会員・会友から3名に授与します。

創立60周年記念特別賞
「ベネチア幻想」小山　保（会員遺作・兵庫支部）

創立60周年記念賞「神殿」朝日　正（会員・群馬支部）

創立60周年記念特別賞「女」中島七光（会員遺作・熊本支部）

創立60周年記念賞「夕陽に染まる」石原光男（会友・山梨支部）

創立60周年記念特別賞
「集落の人々」荒井賢治（会員遺作・徳島支部）

記念式典を開催

9月7日(金)に東京プリンスホテルにて開催の「第60回二科会写真部展授賞式･懇親会」に併せて「創立60周年記念式典」を執り行います。式典には来賓、特別会員、会員、会友、会友推挙者、入賞入選者の出席を得て、「特別功労賞」および「感謝状」ならびに「創立60周年記念賞」を贈賞します。**※出席は事前申込者に限ります。**

第60回二科会写真部展会場でのイベント

第60回展会期中に国立新美術館において、従来のギャラリートークに加え、セミナーを開催します。また、休憩室では歴代二科賞作品および入賞作品の一部をスライド上映します。

■ギャラリートーク

会員が入賞作品を中心に展示作品の解説を行います。

●会場：国立新美術館２階写真部展示エリア内
●日時：9月8日(土) 10:30～11:30　解説者＝近藤誠宏会員・徳永美奈子会員
9月8日(土) 13:30～14:30　解説者＝朝日 正会員･森井禎紹会員・蜂須賀秀紀会員
9月9日(日) 10:30～11:30　解説者＝角尾栄治会員・今井寿雄会員。

■セミナー

会員が自作のスライドを上映し、ライフワークについて語ります。(無料、事前申込不要)

●会場：国立新美術館３階研修室
●日時：9月9日(日)
13:30～14:20(予定) 柳原 香会員
テーマ「島からの手紙」
14:30～15:20(予定) 村上則子会員
テーマ「出会いのかけら」

■スライドショーの上映

写真部展示会場に付設する休憩室に液晶ディスプレイを設置し、第1回展から第60回展までの上位入賞作品を映写します。会期中の全日にわたり開館時間内はいつでもご覧になれます。

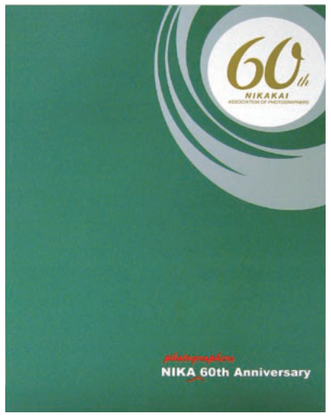
創立60周年記念事業実行委員会

○実行委員長…角尾栄治会員
○実行副委員長…森井禎紹会員、蜂須賀秀紀会員
○実行委員…大山荘一会員、村上則子会員、丹羽正仁会員、荒井賢治会員
○相談役…須賀　一会員、石原正道会員
○事務局…片岡順一会員(事務局長)、天内紀元会員(出納役)
○監事…今井寿雄会員、安久雅人会員

『一般社団法人二科会写真部60年史』を刊行

創立60周年記念『一般社団法人二科会写真部60年史』を『二科会写真部50年史』の続編として刊行します。特別会員・会員・会友の有志305名による記念作品とコメントで構成した「渾身の一枚」、「第１回展－第60回展二科賞作品」をはじめ、特に2003年以降の10年間に注力した二科会写真部本部および支部の行事や活動などを紹介し、60年間の歩みを辿ります。特別会員・会員・会友名簿、第51回展から第60回展までの入賞者・推挙者一覧、支部一覧などを収載します。

● 2012年9月5日発行・サイズ297×225mm・並製本・定価8,000円(出品者は6,000円)。
●作品掲載の特別会員・会員・会友、協賛会社、写真関係団体、美術館、ギャラリー、学校などに贈呈します。



『一般社団法人二科会写真部60年史』

記念ポストカードを製作

第60回展出品者を対象に、希望者に限り出品作品をレイアウトした記念ポストカードを製作（1セット300枚、15,000円、組写真は17,000円）しました。特別会員・会員・会友、入賞者・入選者の多数から申し込みがあり、8月上旬に完成しました。展覧会場での販売は行いません。

※特別会員・会員・会友・会友推挙者のポストカードの一部は、第97回二科展チャリティ事業に参加します。

「第60回展」出品者
展示作品ポストカード

東京会場の撮影会風景

大阪会場の撮影会風景

四国地区撮影会チラシ

中部地区撮影会チラシ

記念撮影会を開催

全国4カ所で創立60周年記念撮影会を開催します。関東地区、近畿地区、四国地区、中部地区の支部が中心となって運営し、特別会員・会員・会友・支部員をはじめ広く一般にも参加を呼びかけ親睦を図ります。撮影指導は会員・会友が務めます。撮影会ごとに作品応募を受け付け、入賞作品を決定します。

●「REAL 優秀賞」(『REAL』誌上に掲載)＝５名。
●「富士フイルム賞」(富士フイルムイメージングシステムズ株式会社からフォトブック製作権が提供される)＝５名。

■関東地区「ハウススタジオ外国人モデル撮影会」

●主催／協力：東京支部・茨城支部・神奈川支部・千葉支部・埼玉支部・山梨支部
●開催日：2012年2月23日(木)
●場　所：水天宮／月島・スタジオヴァンス
●参加者：135名

■近畿地区「東日本大震災復興義援撮影会」

●主催／協力：大阪支部・京都支部・滋賀支部・兵庫支部・奈良支部・和歌山支部
●開催日：2012年5月13日(日)
●場　所：大阪府豊中市・服部緑地公園内の民家集落
●参加者：338名

■四国地区「四国阿波郷土芸能撮影会」

●主催／協力：徳島支部・香川支部・高知支部・愛媛支部
●開催日：2012年10月14日(日)
●場　所：徳島県鳴門市・大麻比古神社周辺地域
●内　容：阿波踊り、人形浄瑠璃、小屋掛け大衆劇団（歌と踊りと芝居のステージと楽屋裏)を撮影
●参加費：7,000円(昼食代込み)
●問合先：森住　博会員(TEL:090－6062－2351)
《参加受付け中!!》

■中部地区「明治村と和装モデル撮影会」

●主催／協力：愛知支部・静岡支部・岐阜支部・三重支部
●開催日：2012年11月23日(金･祝)
●場　所：愛知県犬山市・博物館明治村内
●内　容：秋の明治村と和装モデル撮影
●参加費：3,500円(特別会員・会員・会友・支部員、入館料別途)／4,500円(一般、入館料別途)
●問合先：青山昌弘会員(TEL:090－3484－5551)
《参加受付け中!!》

INFORMATION

■表紙のことば

「夏の始まりに」大竹省二 創立会員

水平線の上に頭を出している小さな緑の島が遠望できるメキシコの海岸。白い砂の海辺でのモデル撮影。明るい光と乾いた爽かな風が独特の開放感を運んできて、透明感のある鮮やかな色調が、夏の午後を描出していた。

マミヤ 67・フジカラー N100

■『第60回展二科会写真部作品集』刊行

2012年度第60回展の全展示作品1,465点をオールカラーで収載した作品集を9月5日に発行。並製本297×225ミリ・カラー396頁・本文48頁・定価15,000円。特別会員・会員・会友・支部員・第60回展入選者は特価12,000円。支部員以外の第60回展応募者は13,000円（いずれも送料実費）。購入希望者は、事務局に申込書をご請求ください。

国立新美術館の展覧会場でも販売します。

■第97回二科展（＝第60回写真部展）地方巡回展スケジュール

◆名古屋展：2012年10月2日（火）～14日（日）愛知県美術館ギャラリー　◆大阪展：2012年10月30日（火）～11月11日（日）大阪市立美術館　◆京都展：2012年11月27日（火）～12月8日（土）京都市美術館　◆広島展：2013年1月7日（月）～13日（日）広島県立美術館　◆鹿児島展：2013年3月6日（水）～17日（日）鹿児島県歴史資料センター黎明館　◆福岡展：2012年4月16日（火）～21日（日）福岡市美術館

※会場によって展示スペースが異なるため、すべての作品が展示されない場合もあります。

■写真部ホームページリニューアルのお知らせ

2012年7月から一般社団法人二科会写真部のホームページを新しいURLでリニューアルしました。皆様のニーズにお応えできるサイトを目指しますのでよろしくお願いいたします。Eメールアドレスも変更しました。

URL：http://www.nika-shashin.or.jp

E-MAIL　info@nika-shashin.or.jp

■<2012年度会員推挙> 14名

（2012年9月7日付）

村上光宏［三重］・川口和子［兵庫］・伴野雄三［静岡］・細川伸吉［長野］・伊藤滋［愛知］・池田正夫［三重］・井口博之［大阪］・水谷勝昭［大阪］・岩上善厚［岡山］・宗岡泰昭［広島］・大森和仁［山梨］・加藤徹［岐阜］・生田英明［鳥取］・大政弘典［愛媛］

■<2012年度会友推挙> 50名

（2012年9月7日付）

柴田ミツ［秋田］・青木和恵［山形］・猪俣きぬ［山形］・高橋康資［神奈川］・池野伸一［千葉］・占部俊和［千葉］・金子勲夫［千葉］・鎌田義行［埼玉］・高杉順［埼玉］・出野一雄［埼玉］・平沼一次［埼玉］・村野隆治［埼玉］・井伊研一［栃木］・浜口節子［茨城］・村松義一［茨城］・上島勝幸［長野］・小幡哲資［愛知］・中尾喜代令［愛知］・立川洋［岐阜］・嶋岡恭司［三重］・光岡茂之［富山］・岡本健一郎［京都］・鬼界榮次［京都］・堀部素弘［京都］・黒田収［滋賀］・山川勝治［滋賀］・阿部浩一［兵庫］・村田和巳［大阪］・山本久右衛門［大阪］・吉川正之［大阪］・秋田陽康［広島］・栗栖照雄［広島］・小下誠［広島］・齋藤泰造［広島］・政田周次［広島］・岡本国治［山口］・中村茂男［山口］・志摩育美［徳島］・宮前稔［徳島］・杉野節子［高知］・横山幸代［高知］・片岡省造［愛媛］・井上学［佐賀］・吉野孝義［大分］・植松佳春［福岡］・神田昭司［福岡］・北脇英雄［福岡］・村上淳［福岡］・百﨑礼治［福岡］・吉田斉美［福岡］

■<2012年度特別会員認定者> 17名

（2012年2月22日付）

青木君夫［大阪］・原田政章［愛媛］・詫間喬夫［愛知］・浜口タカシ［神奈川］・渡部章正［愛媛］・赤塚弘光［広島］・大藤薫［広島］・高間新治［愛知］・沖守弘［東京］・川本貢功［島根］・津嶋久仁香［岡山］・中山陽［福岡］・吉成正一［徳島］・糸井英雄［大分］・渡里彰造［鳥取］・高橋扶臣男［千葉］・西岡伸太［滋賀］

●東日本大震災の義援金について

◎支部単位で直接寄付

和歌山支部／東日本大震災義援金7,500円、和歌山県平成23年台風12号災害義援金7,500円。

● 2012年1月26日発行『REAL』16号・INFORMATIONで「東日本大震災の義援金について」項目に下記の記載が抜けていました。訂正してお詫びいたします。

○福島支部／義援金 50,000円。

○秋田支部／義援金 115,500円。

■お詫びと訂正

2006年12月発行の『REAL』9号で表紙作品の作者氏名の記載が落ちていました。訂正してお詫びいたします。

『REAL』9号表紙：

山岡成男会員（兵庫支部）

■会員・会友情報

長島幹生会員（三重）2012年3月10日自主退会

杉原正度会友（愛知）2012年3月13日逝去

清原のりお会友（愛知）2012年3月27日逝去

永井末雄会友（大阪）2012年6月22日逝去

小野田章和会友（和歌山）2012年7月23日逝去

田崎　力会員（宮崎）2012年8月3日逝去

二科会写真部広報誌『REAL』Vol.17

2012年9月7日発行

発行／一般社団法人二科会写真部

発行人／大竹省二

編集／一般社団法人二科会写真部

〒106-0031 東京都港区西麻布1-4-20

ワルトハイム西麻布601

TEL. 03-3470-8033　FAX. 03-3470-8034

http://www.nika-shashin.or.jp